

い わ ら や り み ぞ
井 原 鎌 溝 遺 跡
発掘調査の成果 - 1 -



写真1：方格規矩四神鏡

井原鎧溝遺跡と『柳園古器略考』

井原鎧溝遺跡について、福岡藩の国学者・青柳種信は、著書『柳園古器略考』中、「同郡井原村所穿出古鏡図」を併記し、次のような内容を記録しています。

「天明年中（1781～1788）に井原村の次市という農民が、日照りで水が不足していたので、鎧溝（三雲村との境界）というところで水口を開こうと棒で突いたところ、岸から朱が流れ出た。怪しんで掘ってみるとひとつの壺が発見され、中から古鏡数十・鎧の板の如きもの・刀剣の類が出土した。鏡の破片は数百片で、中には全うきものあるが、側で見物していた者等が取ろうとして終には無くなつた。その破片は彼農民の家に今もあり、そのうちの小片を拓本墨を用いて載せる。文政6年4月」

ここで記されている壺とは、おそらく弥生時代後期に伊都国一帯で使用されていた壺形の甕棺墓のこと、古鏡や刀剣の類などは、死者とともに副葬された品々であったのでしょう。

種信が残した鏡の拓本はすべて方格規矩鏡で、21面分あったとされています。この豊富な副葬品から歴代伊都國王の一人と位置づけられ、鎧溝の王を『後漢書』に記述された倭国王「帥升」に当てる説も提唱されています。



写真2：青柳種信肖像画

平成16年度発掘調査の概要



写真3：井原鎧溝遺跡の墓群

平成16年度に実施した、県道瑞梅寺池田線の拡幅工事に伴う井原鎧溝遺跡の発掘調査では、甕棺墓・木棺墓・石棺墓など、弥生時代後期に属する墓群と、それを切るように流れ、旧地籍図と一致する水路を検出しました。墓群には、『柳園古器略考』の記述を彷彿させる、中国製の銅鏡やガラス小玉を副葬した墳墓が含まれていました。



◎ 方格規矩鏡の発見 ◎

調査区中央の木棺墓から、割れた状態の方格規矩四神鏡（写真1）が、ガラス小玉約170個（写真5）とともに出土しました。今回出土した鏡は1面分がほぼ復元できたため、『柳園古器略考』拓本中にある同型式の鏡片とは別の鏡であると思われます。よっていわゆる王墓とは別の墓のものですが、鏡を保有するに値する有力者の墓であることには間違いないでしょう。

鏡の直径は約19cmで、中型鏡でも大きいものといえます。東西南北の象徴である四神のうち、北の玄武と南の朱雀が確認されます。また一部銘文が読み取れます、文字間が広く、省略して表現されています。

外区に施された複線山形文が鈍く緩やかで、十二支のうち「巳」が漢字で表現されるなど新しい様相が含まれているため、中国で紀元1世紀中頃に製作された後、日本に伝来して副葬されたのは弥生時代後期中葉～後葉頃と考えられます。

◎ 木棺墓に副葬された内行花文鏡 ◎



写真4：想定復元される鏡式

いずれも破片で、1号木棺墓から出土しました。摩滅はなく、縁は面取りして仕上げるなど全体的に丁寧に作られています。

復元径は約18cmで中型鏡に含まれ、舶載鏡と思われます。

1号木棺墓は他の木棺墓より大きく、棺の床面には鮮やかな赤色の顔料が塗布されていたことから、上層クラスの人物の墓であると考えられます。

また、7号木棺墓からも内行花文鏡片が出土しています。

◎ 様々なガラス小玉 ◎

検出した墓のうち、一部の甕棺墓および大半の木棺墓にガラス小玉が副葬されていました。大きさは1mm程の小さなものから6mm程の大きなものまであります。大きさの違いは埋葬された人物の位を象徴しているのかもしれません。

また、7号木棺墓棺内からは1000個を超える小玉が集中して見つかっています。



写真5：方格規矩四神鏡と一緒に出土したガラス小玉



写真6：9号甕棺墓から出土したガラス小玉

◎被葬者は伊都国の有力者たち◎

今回の調査では次のような成果を挙げることができました。

- ・井原鑓溝地区において、初めて弥生時代後期の墓群を検出
- ・木棺が多く分布し、各木棺墓に銅鏡1面、あるいはガラス小玉が副葬されている

このような墳墓のあり方は、王に次ぐ上位階層の人々、あるいは王に近い人々がこの地に葬られていたことを示唆しています。『魏志倭人伝』中、伊都国には代々王がおり、長官1名と副官2名、そして一大卒という特別な役職が存在していたことが記されていますが、こうした伊都国の特殊な階層分化が生じていく過程や、当時の社会構造を探る上でも、非常に重要な資料といえます。

これまで謎とされてきた井原鑓溝王墓の所在究明に向けて大きく前進し、今後の発掘調査にますます期待がかかります。

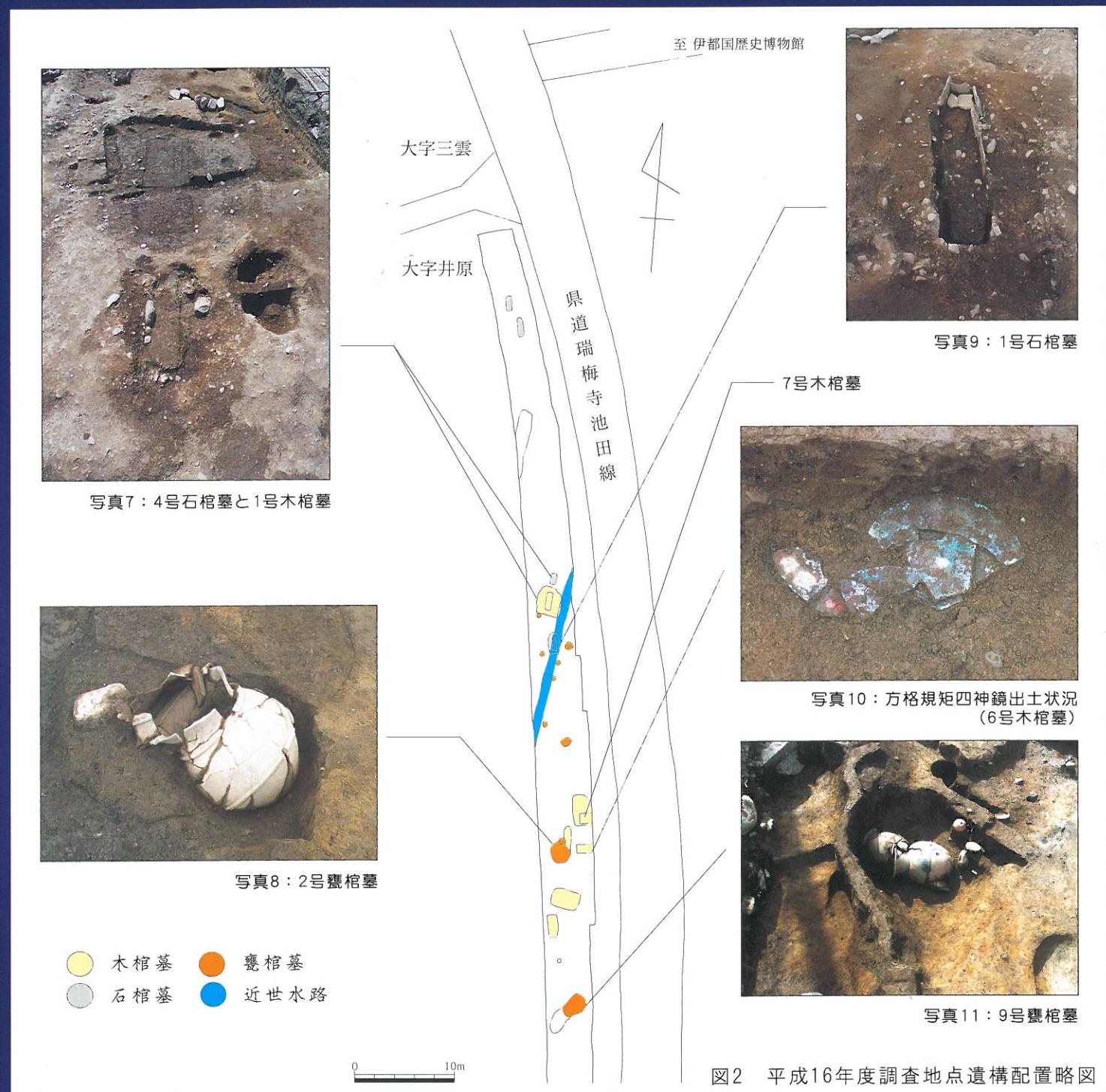


図2 平成16年度調査地点遺構配置略図